

ベネズエラ・チャベス政権の分析

－「平和的、民主的革命」は可能か－

(財) 日本国際問題研究所
客員研究員 伊藤 昌輝

はじめに

1990年代の初頭、中南米ではもはや権威主義的政治と国家主導型経済は終焉したと見なされた。しかし、あれから10年余り経た現在、中南米の多くの国で民主主義と自由市場経済が新たな危険に晒されている。中南米の課題は二つの“D”、即ち“Democracy”(「民主主義」)と“Development”(「開発」)であるという状況は現在も基本的には変わっていない。確かにキューバを除くほとんどすべての国で民主的な政権交代が行われるようになった点、80年代以前の中南米と比べ隔世の感があるが、それでも2000年以降南米の大統領10人のうち5人が任期を全うせずに失脚しており、また「形式的(手続き的)」民主主義は維持されている場合でも、法の支配、三権分立、人権擁護等「実質的」民主主義の質の面ではまだまだ脆弱と言わざるを得ない国が多い。

また、「開発」についても、中南米はこれまで「政府の失敗」と「市場の失敗」を繰り返している。市場と政府の相互の補完、そしてそれを実現する適正な制度の構築が求められているが、その達成の道筋はまだ見えていない。

ベネズエラは世界有数の産油国であるほか、天然ガス、オリノコタール、鉄、ボーキサイトといった天然資源に恵まれており、中南米では第4位の経済規模を持つ経済発展の可能性を秘めた国である。しかし、近年貧困化が進んでおり、国内における貧富の格差も広がっている。また、この国の民主主義と政治の安定を支えていた二大政党制も90年代に入って瓦解した。このような状況のもと、1998年12月、「ボリバル革命」を標榜し、ベネズエラの政治、経済および社会の枠組みを「平和的、民主的に」変革するとして登場したウーゴ・チャベス(Hugo Chávez)大統領は国民の大きな期待を担って政権の座に就いた。この政権は単なるポピュリズムの再来という歴史の繰

り返しに過ぎないのか、それともなんらかの展望があるのか。チャベス大統領の言う「平和的、民主的革命」は可能なのか。本稿では依然として中南米の課題である「民主化」と「開発」という視点を座標軸に置きながら、チャベス政権が登場した背景、同政権の特質、「ボリバル革命」と同政権の政策等を分析するとともに、「民主的革命」は可能なのか、その課題と展望につき考察することとしたい。